

かれんと

2022.2.25
時代の流れ
あるいは新しい潮流
No.60

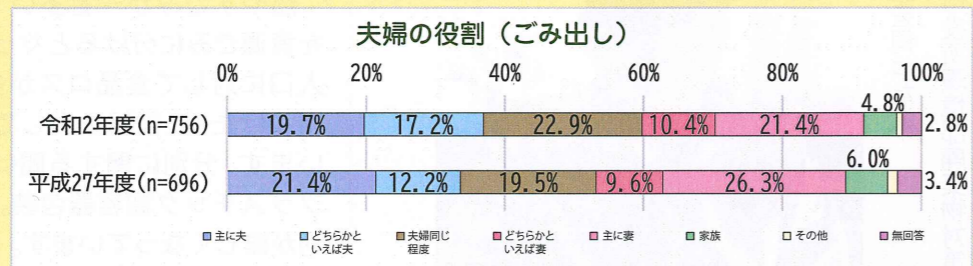
男女共同参画社会の実現は ごみ出しから???

生きてると必ず出るごみ。そのごみは誰が捨てていますか？
分別はできていますか？ 減らすための工夫は？
今号ではごみについて、考えてみました。



ごみは誰が捨てていますか？

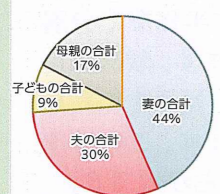
R2年度 鹿沼市男女共同参画に関する意識調査より



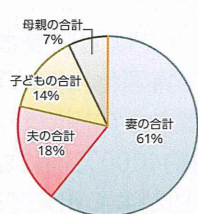
ごみ出しについて、身近な人21名に聞きとり調査をしました

かれんと編集員による聞きとり調査より

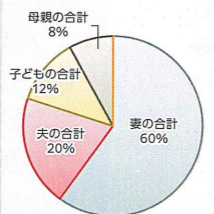
ごみ出しは主に誰がしますか？



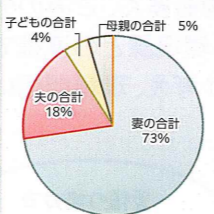
分別は誰がしますか？



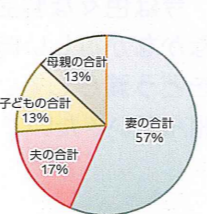
分別を知っているのは誰ですか？



ごみをまとめるのは誰ですか？



ごみ出しの曜日を知っているのは誰ですか？



最新の『意識調査』では、ごみ出しは「夫」の合計が36.9%となり、平成27年度に比べて増加しています。しかし、『聞きとり調査』では、ごみ出しこそ「夫」が30%ですが、ごみ出しまでの作業では「妻」の割合が高く、「見えない家事」の負担はまだまだ女性が担っていると言えます。

『聞きとり』では、30代のある家庭で、子ども(小学生、幼稚園児)も入れた**家族全員で分別**をしていました。最初は手がかかるかもしれませんが、自主性を育て未来に役立つ取り組みですね。別の20代の家庭では、夫が妻の仕事を理解し時間の融通がきくことから**全ての家事を夫がやっている**とのことでした。これからは、お互い協力していければよいと思います。

鹿沼市ホームページから「かれんと」バックナンバーがご覧いただけます。
トップ>福祉・健康>人権・男女共同参画>男女共同参画>男女共同参画情報紙「かれんと」バックナンバー

ご意見・ご感想をお寄せ下さい 人権推進課メールアドレス jinken@city.kanuma.lg.jp

男女共同参画セミナー開催報告

未だ続くコロナ禍で、「生きづらい」と感じる人が増えているといます。そこで今年度は「**ともに助け合って生きて行こう!**」というテーマのもと2つの講座を開催しました。

第1回目 「子ども食堂を知ろう」

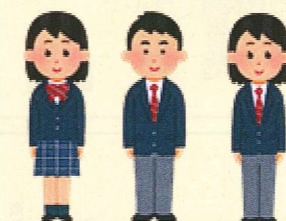
講師:子ども食堂ネットワークかぬま
子ども食堂ようき 福田愛子氏

最近よく聞く子ども食堂について、お話を聞きました。

本市には子ども食堂のネットワークがあり、食材を提供してくれる企業や農家、社会福祉協議会とも連携しているそうです。活動は、「食事支援」が基本で、現在はコロナ禍のためお弁当になっているとのこと。各食堂で開催日や形態は違い、「物品支援」「学習支援」などもされているそうです。調理や学習支援、送迎のスタッフの確保など課題も多くある中で精一杯活動されている様子や、運営者の熱い思いが伝わるお話をうかがうことができました。



子ども達の食を支え、地域をつなげる支援の輪が確実に広がっています。



第2回目 「誰もが生きやすい社会のために ～多様性について考えよう～」

講師:S-PEC 佐藤氏

女性の身体で生まれた末っ子は男(トランスジェンダー)だった。講師が母親として事実を受け止めるには長い年月が必要だったそうです。女の子として育つ中、息子さんは傷ついて死を考えた時期もありましたが、家族の理解と協力で救われ、同じ悩みを抱えた方々の存在が大きな支えとなったとのこと。しかし中には死を選ぶ人もいると聞き胸が詰まりました。LGBTQの人達が生きやすい社会は誰もが生きやすい社会。子どもの頃から学校の授業に取り入れるなどして、正しく理解してほしいという講師の思いは受講者の心を打つものでした。

本市では県内初となる「パートナーシップ宣誓制度」を令和元年度から取り組み、誰もが住みやすいまちをめざしています。

かれんとイチオシ!

♥小冊子♥

「小学生の私たちが知っているだけで、せいかいをかえることができる」男女の心と体がスイッチ・トランスジェンダー

著・うい

著者の秋元ういさんは現在小学5年生。3年生の時にテレビを見て興味をもった「トランスジェンダー」のお二人にインタビューをして、感じたり気づいたことをまとめた本です。子どもの視線は、大人の私たちにも大切な事だと思いました。

ういさんは言います。「ふつつ」という言葉で傷つく人がいる。「ふつつ」を自分勝手に決めて「ふつつにしなさい」と言うのはいけないと思った。そして、人の目は環境だということ。知っているだけでその目が変わる。知っている事をみんなに伝えると環境が変わる。私たちが知っているだけでせいかいをかえることができる。トランスジェンダーだけじゃなくいるんな人が過ごしやすい、優しい目で過ごせる環境が広がるといいなと。

男女共同参画セミナーにもリンクする内容に考えさせられました。

編集員 高橋和子・太田吉友・原とみ子
下村久美子

ダウン症書家金沢翔子さんの母、泰子さんのエッセイだったかと思えます。翔子さんが米国のロックフェラービルでの取材で「今までで一番高い所は？」と聞かれ「お父様の肩車」と答えられたと。また翔子さんが生れて暫く、泰子さんはダウン症を隠していたそうですが、ご主人は「千人に一人授かる大切な子」とむしろ誇りに思われ育児に懸命に携わられたそうです。家事育児を妻任せで過ごしてきた私にとって心打たれるお話でした。

編集後記

江戸時代、日本の男性は子煩悩？！

江戸時代、庶民は男女が協力して家庭と仕事を営むのが普通でした。

夫婦共働きは当然で、職人は男性でしたが、女性は下働きや繕い物などの仕事をしていました。子育てや介護は男性がしていて、子煩悩な子育ての様子は西洋の歴史家も記しています。また、介護は長男が長(おさ)として仕事を辞めてでもやると決まっていたそうです。

また、物が少なかったこともありますが、あらゆる物をリサイクル・リデュースすることが当たり前でした。江戸時代には様々な行商人が江戸の循環型社会を支えるうえで重要な役割を果たしていました。現代に生きる私たちもたくさん学ぶ事がありますね。他にも、江戸には損料屋(そんりょうや)と呼ばれるレンタル業者が存在し、主力商品は男性の「ふんどし」や女性の「お腰」などでした。し尿もまた生活環境の保全を図りつつ、衛生的に処理し、田畑の貴重な有機資源でした。

江戸のリサイクル業者たち、まだまだたくさんあります。!

修理・再生業者等の一例

鑄掛(いかげ)屋

金属類の修理専門業者。道具を持ち歩き、鍋・釜などの底の穴や折れた燭台等を修理

下駄の歯入れ

歯のみ交換可能な下駄があり、すり減った下駄の歯の部分差し替え修理

瀬戸物の焼き接ぎ

割れた陶磁器を白玉粉で接着し、加熱して焼き接ぎ修理



鑄掛屋

回収業者等の一例 (不用品の売買、交換、下取り等)

古紙回収

紙製品を買い取り、再生紙製造業者である古紙問屋に売却

灰買い

家庭から出る灰を回収して農家に売却、肥料として有効に活用

蠟燭の流れ買い

蠟燭の燃え残ったしずくを目方を図って買い取り再利用



紙屑買い

※このコーナーの画像はいずれも国立国会図書館デジタルコレクションより引用しています

古鉄(ふるかね)買取業

くず鉄を買い取り、鍛冶屋などに売却

古着屋

固定店舗もあったが、行商も多く、仕立ててある古着だけでなく端切れなども販売



灰買い



蠟燭の流れ買い

ごみ捨てから男女共同参画社会の実現へ???

ごみについて聞く・知る・考える

1人1人の行動が変わる

わたしたちが望む未来へ!

実際に分別やごみ出しをする事がきっかけに。

- ・環境を汚染しないか
- ・適正な価格で流通しているかなど、買う時の視点を変えてみる。

「買う」「使う」「捨てる」は生活・人生そのもの。ごみの問題は環境だけでなく暮らしや生き方に影響します。何をかうか?という所から一人一人が行動を変えていけば未来が変わるかもしれません。一人一人が主人公の社会、これこそ男女共同参画がめざすところですね。

では、ごみはその後どのように処理されているのでしょうか。鹿沼のごみの状況は? ~クリーンセンターで聞きました~

Q1 鹿沼市のごみの総量は?

令和2年度では家庭系ゴミで約2.5万トン、事業系ごみと合わせると約3.2万トンになり、栃木県内25市町村のうち8番目に多い量になります。過去5年間で、令和2年度が一番多い量です。



人口減ですが、世帯数が増加しゴミも増えています。

食品ロスは家庭からも取り組みましょう!

今回お話を伺った人

鹿沼市役所環境部廃棄物対策課 萩原哲係長



今は色々な製品や物も多く、ごみの分別もなかなか難しい時代。環境課との連携でごみをどう減らしていくか考え、環境問題に取り組んでいきたいです。

皆様の協力で寿命が延びます。

Q2 ごみの割合や分別の状況は?

燃やすごみが一番多いですが、食品の容器を資源ごみに分けるとぐっと減ります。また、人口に対して食品ロスが多いため、業者へ働きかけたり、情報を出して減らす工夫をしています。分別に関する問い合わせが多いのはプラスチック製容器包装。商品の多様化で分別が難しくなっています。

今後もしっかり分別したいですね。

Q3 分別後はどうなるの?

プラスチックは回収後さらに手作業で分別し、洗浄して資源化に努めています。状態が良いので、業者からの評判がよく、資源物の売上げが年間約4000万円になります。これは市民からの分別がよく出来ているおかげです。

Q4 最終処分場(灰の埋め立て地)の状況について

今の処分場は埋め立ての量が残りがちなため、今後二期工事を行い10年間分の処分量を確保していきます。

引き続き、市民一人一人が燃やすごみを減らし、資源物の再利用に努めることで、施設の延命化や安定的な運営につながります。



取材を終えて

今回お話を伺ってごみを最終的に処分するまでにたくさんの工程、人々が関わっているという事がわかり、ごみ出しの意識もずいぶん変わりました。市内の小学校では4年生の時に社会科見学で学ぶという事ですが、子ども達には学んだ事を忘れないでほしいと思います。そして私たち大人もこれからの未来のために今から出来ること、やらなくてはならないことを考え、実行していかなければいけないと思いました